



理事会だより (1・10)

新年にあたり池田会長より、昨年は協会活動が四年ぶりに正常に戻ったこと、理事、協会の活動協力への感謝が述べられた。

一、梅まつり俳句大会について①大会の役割分担を確認(総務部) ②各グループは当日に結社賞を事業部に提出のこと ③点盛十八日予定。(事業部)

二、桜まつり俳句大会について協会員への投句勸奨文書・投句用紙を配布、なお外部へは郵送済み。(事業部)

三、次期会長につき十月の指名委員会で選考された村場広報部長について、本理事会で出席理事並びに池田会長の了解を受け三月理事会前の臨時総会で正式決定の段取へ。(長谷川指名委員会委員長)

四、その他①立春句会の確認②定期総会に向けて会員動向確認要請(総務部)。

「俳句おだわら」10句抄(677号より)

青木たけを 抄出

小春日が続く至福や戦禍由由し
恍惚と霧に巻かれてしまひけり
母とする地名尻とり夜長かな
丁寧生きる手仕事夜長かな
仏前に先づは一献今年酒

野辺送り戻りて一人秋耕す

伸びるだけ背筋伸ばすや風は秋
家内のいづくこほろぎ終夜よしまがら

世界を見て日本を知る秋の夜
言へないこと言へて白菜真二つ

大島美恵子 抄出

仲間皆期間限定茸汁

赤べこの首振りやまぬ夜長かな

遊具より暮るる公園草の花

立冬の小石をはじく欽仕事

新調の靴はわがまま草紅葉

小魚の閃く水路稲架日和

蓑虫や昔は父の怖かりし

ひかりつつ移ろふ雲や落葉掃く

幼なき日甦りたり冬星座

をさなごにあしたはとほし草の絮

加藤 春江

瀬戸 悠

河本 純子

高井 幸子

高杉掘三朗

加藤まり子

加藤れい子

西賀 久實

野川木一路

小林永以子

廣田 悦子

寶子山京子

池田 忠山

久保寺トミ子

加藤 富江

佐宗 欣二

齊藤 桂

古屋 徳男

岩本ひさみ

畠 梅乃

年間ベスト一句集（二五一名）

石露咲くや隠れ平家の調度品	青木 勝子
白地着て心放つやひとり酒	青木 孝子
春愁や湖畔に画架の影伸ばし	青木たけを
蒲公英の絮太陽にひと呼吸	青山 典子
去年今年まだ読み止しの歎異抄	秋山 昇
点と点つなぐ賢治の星月夜	足立 和子
鮎跳ねて光を撥ねて水匆ねて	新井たか志
一月も半ばの雨となりにつけり	池田 忠山
深秋の静かに閉づる絵本かな	池田 令子
せせらぎの音にふくらむ花菜かな	石井きよ子
濃く淡く刻の流れる藤の下	石井千代子
流れ星漕げど帰れぬ伝馬船	石井 秀稀
広電のブレーキの音秋深む	石田加津子
雑木林ぬけて畔道彼岸花	板谷 雅泉
ときに鬼女ときに仏や曼殊沙華	市川めぐみ
水温むなんでも真似るみそつかす	一ノ瀬茂代
諍ひは苦し秋刀魚の腸旨し	伊藤はる子
流星の果てのひとつに古木屋	伊藤 道郎

俳句おだわら（1・19ノ切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（12・22）	久江報
木枯や富士の機嫌をうかがへり	足立 和子
小春日や土器のかけらの煉瓦色	川本 育子
落葉かき風の気儘に吹きだまる	高橋 小糸
臘八会大入り日のとどまれり	山崎 悦子
うつし世のはなやぎにをり冬桜	近藤 久江
◆香雨・梅ごち（12・24）	忠山報
子と作る聖菓に降らす粉砂糖	肥後ちさこ
毛糸編む初めての子につきつきり	関戸わよこ
ときをりはお茶を一服年用意	青山 典子
年用意空も拭かんと窓を拭く	門松 鳳文
ひと息をつく間もなく年用意	吉田 百代
冬晴や相模の海は銀の皿	吉田 康雄
戦争を報ずるテレビ聖夜餐	陌間みどり
年用意濠の芥を浚ひけり	小澤 純子
その沖を客船の航く懸大根	池田 忠山
◆こよろぎ（1・11）	つとむ報
歌謡曲流るる街に聖夜来る	高杉掘三朗
大楠のパワー授かる初詣	板谷 雅泉

移り住みし何処も故郷卒寿春

葉桜やコンビニポストへ音一つ

諸々のことを忘るる柚子湯かな

文豪の旧居あかるし鴉の声

黄泉などに紛れこむなよ赤とんぼ

シャガールの人飛んでいる大花野

夜桜やしろながすくじらがうねる

停泊の軍艦しづか夏燕

緑雨きて介護に仏鬼も棲む

腰下す畦になずなや時静か

抜襟の美人画新酒汲みにけり

新涼や初孫大き声で泣く

歩け歩け休み処のきのこ汁

十六夜や花より酒を師の星に

甚平を着て粗大塵には非ず

盆石のなゝかまどの実俳句会

もう一度星空見上げ夜長かな

青柿や少年という未成熟

コップに名書いて防災の日の朝

道一本天に向いて五月晴

井上 和子

岩楯惠津子

岩本ひさみ

植松テル子

内田知江子

大石 和子

大石 雄介

大木 敬子

大佐田うづき

大沢 年子

大島美恵子

大塚 行人

岡田 典代

岡本 史郎

尾崎 一夫

尾崎 幸子

小澤 純子

小澤 園子

小野 菊土

香川 花子

住み馴れて雪を恐れぬ子となれる

風花や家路は遠き山狭間やまはざま

◆山北(12・21)

喪のハガキ受けて知りたる年の暮

繁華街聖夜に響くハンドベル

冬草の青し下校の子らの声

吊り橋の半分日陰冬苺

数へ日やいつもの坂がばかに急

◆おほる(1・11)

七種や八百屋の刀自の九十九髪

元旦に被災地輪島の箸並べ

元旦の炸裂祈る日本列島

流暢な友の言祝ぐ淑気かな

久方の声ある里や冬休

煩惱の解けだしそうな冬日射す

齋打つ囉詞は口伝え

風花や北の国からラブレター

あの頃の声聞こえそう年賀状

湯気の継ぐ味としきたり若菜粥

人生は友居てこそや老の春
年賀状光輝高齢と書かれいて

植松テル子

神山つとむ

由里子報

和田恵美子

尾崎 幸子

星 一義

石田加津子

竹下由里子

菊土報

横塚 昌平

中津川晴江

加藤 春江

高橋みどり

石井きよ子

石井千代子

小野 菊土

香川 花子

中根登美子

廣田 悦子

中村 昌男
二上 光子

虹の橋平和航路の懸橋に	風間 秀泰
蜜柑山日の出の色を貰ひけり	柏木 良花
明日また使ふ鏡や夜の秋	片野 秋子
風説に付け足しもありこぼれ萩	片野 節子
桐の花背中に手を添ふ過疎の村	勝木 澄子
言ひ淀む頼みごとあり春の月	加藤 幾代
それぞれの部屋にそれぞれ夜長かな	加藤かほる
精一杯戦後を生きて胡瓜かむ	加藤 健治
たい焼き君海に遊んだ反抗期	加藤 富江
ホルンの音響く山並み秋澄めり	加藤 春江
涼しさや如意輪さまの細き指	加藤まり子
秋茄子やむらさき似合う妣でした	加藤れい子
船頭の太き二の腕風光る	門松 鳳文
白南風や末期の息のやはらぎぬ	神山つとむ
寒林を這い登りゆく朝の雲	川合 昌子
熊蟬や小説は今佳境なる	川本 育子
十葉が天使にみえる母逝きて	河本 純子
秋の暮一本松よいつまでも	河本チヨ子
醤油屋の滲む玻璃戸やこぼれ萩	菅野 英余
冬瓜の鈍感力の重さかな	北村 文江

◆春野（12・17）

きよ志報

虚飾なき寒林一樹威をなして	秋山 昇
しやりしやりと音たてをんな来る霜夜	伊藤はる子
どことなく座りの悪しき雪だるま	内田知江子
わたくしの心を捜す漱石忌	尾崎 一夫
茶が咲いて昨日と同じ今日がある	瀬戸 悠
重なつて落葉眠るは解脱とも	二見 和江
宴果て酔ひの余韻に木守柿	長谷川きよ志
◆青梅（1・10）	幸子報
初富士の雪の厚みに願いけり	大塚 行人
金泥の盃で年酒の御相伴	湯本とし子
この道は内緒の小径冬椿	加藤まり子
着ぶくれて野良着の裾のよこれかな	久保寺トミ子
婆リュック値上げを背負ふ師走かな	田中 幸子
◆みなみ（12・9）	かほる報
冬の蝶をんなばかりに寄りて来る	加藤れい子
刃を入れて白菜の芯輝かす	加藤 健治
枯野原口ダンの像の思惟深む	市川めぐみ
回りくる消防の鐘師走風	豊田 幸枝
奥の院訪う近道の実千両	斉藤 静
除夜の鐘聞いて心の塵はらう	小瀬村信子

徘徊老人案山子に道を聴いている
鈴虫やおまけのオモチヤ唄ひだす

散策の下駄にからまる春の月

五感をも変へてしまふや初御空

野にひゞく程の噓くまらや畑仕事

今はもうひとり花野を夢の中

麥鶉むくりこくりの鬼が来る

除夜の鐘聞いて心の塵はらう

言へないこと言へて白菜真二つ

退職を祝ふ鳥旅春夕焼

帰り花きらりと人を引きとめて

筆先に魂吹き込める白露かな

白桃を剥く無心なる指おゆかな

流星や風に奏づる馬頭琴

ようやくに座の静まりて夏料理

柿の秋他郷の人として生きる

下流へと月の堤の歩を返す

白梅や心の素足活き活きと

七草や足したみつばの品良き香

天狗下駄カラコンと初紅葉

木村 和彦

木村 幸枝

木村美千代

久津間百合子

久保寺トミ子

神野美代子

小島ノブヨシ

小瀬村信子

小林永以子

小林 環

小宮 早苗

近藤 久江

西賀 久實

齊藤 桂

齊藤 静

佐々木重満

佐宗 欣二

佐藤 正子

柴田 礼子

清水美代子

木枯や助手席に乗る葉っぱかな
数え日や猫の手借りてすべて完
諦めが老いを加速す日向ぼこ

◆たけのこ(1・10)

今年こそよろしくねと賀状かく

水平線松ヶ枝ごしの初日の出

初水どれも砕かれ通学路

初競りや孫の奢りの漁師飯

蟹を食む無口になるや新年会

◆鷹(1・6)

県境跳んで聖夜の長野入る

去年今年寝返り打てば骨の鳴る

鳩どりや細きこざ波月まどか

風ひびく朝のガラス戸冬至粥

拜殿の柱の猪目冬の梅

数へ日や一晩水に漬けし豆

寒星を仰ぐ早立ち喪服着て

ポインセチア抱へ家路を急ぎけり

留守番を仔犬に頼む十二月

搔き立てて埋火点る遅明かな

勢ひ良き髭を選りたり達磨市

柳川 紀枝

加藤 富江

加藤かほる

悦女報

徳田 公子

三木 泰子

小宮 早苗

宮崎 悦女

久津間百合子

十五報

青木 孝子

池田 令子

西賀 久實

佐宗 欣二

須田 晴美

中田 笑子

百川 秀子

山崎美知子

柏木 良花

瀬戸 りん

シヤム猫の我に擦り寄る春夕

寒垢離に切れて飛び散る念珠かな

六月のキラリと光る薬指

戦火尚しづかに灯る聖樹かな

藍染めの藍のまどろみ秋立てり

石ころはきょうも石ころ日脚伸ぶ

花冷や薄き白磁のティーカップ

散り際を逃してよりの冬薔薇

ドライアイ冬がひりひりしてをりぬ

多喜二忌近し翻車魚の水脹れ

言ひたき事其々海月発光す

見えてゐる島へ渡船や海紅豆

幸せの御裾分けせしさくらんぼ

飲食も起居もふたり冬の梅

身に入むや読経にひびく大太鼓

非通知の電話ほつとく蓬餅

過ぎし季の健気が淋し秋薔薇

一卵性生まれ朝へ桜まじ

羊水のような池なり散紅葉
亡き友のささやきに似た春の風

下平 美子

庄司 下載

高杉掘三朗

杉本 久子

杉山あけみ

須田 聡子

須田 晴美

関戸わよこ

瀬戸 正洋

瀬戸 悠

瀬戸 りん

芹澤 常子

高井 幸子

高橋久美子

高橋 小糸

高橋千代子

高橋みどり

瀧本 敦子

竹下由里子
武居裕美子

ぼつねんと路地の消火器雪ぼたる

沖雲に没日の照や熊手買ふ

追伸に本心書きぬ冬林檎

川尻の水の澱や葦枯るる

草々と文を結びし年の暮

独り居の障子明りや臨書終ふ

真つ新な靴に砂踏む初日の出

凧や天守の梁の摩利支天

枯葉舞ひ二人の肩を掠めけり

居酒屋の仕切り一枚腰障子

山並に沈みゆく日や木守柿

菓草を煎じる匂ひ雪催

徳高き富士は毅然や冬ごもり

カットして寒さの中を軽やかに

笛吹川ふえぶきの流れ平らや龍太の忌

書割を飛び出すきつね初笑

顔洗う寒九の水や若々し

阿亀おかめ蕎麦食うて掘割梅早し

探梅や頬撫づる風ひんやりと
閑寂の山縫ひ箱根七福神

高橋久美子

中山智津子

齊藤 桂

芹澤 常子

大木 敬子

大島美恵子

中根 和子

田下 昌人

加藤 幾代

高橋千代子

守屋 まち

米山 翠

來田 新子

大沢 年子

片野 秋子

小林 環

下平 美子

鳥海 壮六

古屋 徳男
村場 十五

◆零(1・8)

史郎報

駅蕎麦に奢る海老天日短

友の文また読んでいる園の秋

階を被ひつくして萩ゆるる

隊列をはなれる蟻の勇氣かな

ガンジーになる途中なり千大根

掘り返す鋏になじみし春の土

郭公よ大悪党になつてみたい

子等の声枯野に色を加へたる

初風や手に届きそう初島よ

無住寺の奥の暗がり昼ちちろ

戦知る昭和一桁梅の花

向日葵や先回りして母待つ子

生きるとは老いて行くこと落葉掃く

金太郎居さうな森や落し文

つつがなき一日のありて汗を拭く

子供等が風になつたよ芒原

背が伸びてたんぽぽはもう一年生

雁の群発つ森々とあさぼらけ

上昇気流見事に捉え渡り鳥
うららかや子の手開けばだんご虫

田下 昌人

田代 孝子

田中 恵一

田中 幸子

田畑ヒロ子

田渕 令子

佃 悦夫

出澤 洋子

徳田 公子

豊田 幸枝

鳥海 壮六

中田 笑子

中津川晴江

中根 和子

中根登美子

中村 昌男

中村 裕子

中山智津子

野川木一路
陌間みどり

遙かなる山の輝き年明ける

煩惱は無限底なしどんど焼き

どんど焼煙りの中に仏様

壊れゆく友の行動寒桜

「手の平において」綿虫もう居ない

一月や卒寿と曾孫共に来る

初暦まず父母忌入れ合掌す

飼猫のゆつたり眠るお正月

書き初めに「世界平和」と書く子かな

菩提寺に子等六人の初写真

金沢を想ふ塗り椀三ヶ日

◆沈丁（1・18）

水仙や子は青年に真つ直に

大人おとなになれない私の初日の出

水仙や乙に構へし孫二十歳

水仙や土曜は母のため使ふ

名付け親となる朝ほら水仙花

しきたりを省く齢や初御空

ごりごりと土踏まず押す七日粥
水仙の素直に伸びる空地あり

青木たけを

伊藤 道郎

川合 昌子

佐藤 正子

中村 裕子

野川木一路

岡本 史郎

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

寶子山報

若村 京子

柳澤ミサ子

田中 恵一

河本 純子

瀧本 敦子

勝木 澄子

菅野 英余
高井 幸子

たか志報

パイプ椅子百脚生身魂百人

長谷川きよ志

拾ひたる時計動いてゐる夏野

畠 梅乃

見渡せば海見上ぐれば星月夜

肥後ちさこ

蒲公英の旅立つ構え風を待つ

廣田 悦子

みかん積む山車の軋みちちの背せな

二上 光子

啓蟄の活断層よお静かに

二見 和江

夕虹や明日また使ふ鍬洗ひ

古屋 徳男

角ばつた犬やつてくる山桜

寶子山京子

イテウオンに若き命は雪となる

穂坂志げる

地藏様の前立のごと雪たるま

星 一義

あの頃を誇る城址の松落葉

松下 俊之

夏祭海の男の權伝馬

三木 泰子

もつれ糸解かぬもよろし涅槃西風

峯尾ユキエ

新涼や鼻に抜けたる濃茶の香

蓑宮 わか

湯屋ひとつ芒明りの峠道

宮崎 悦女

一喝に去なざる鴉夏の朝

村場 十五

海棠や二つ部屋とり二人旅

百川 秀子

明月や母の遺せし舞扇

守屋 まち

しらじらと夫居ぬ部屋の白障子

柳川 紀枝

柳澤ミサ子

一抹の迷ひふつきれ白水仙

土塊の匂ひ急かされ鍬始

追羽根の土払ひしてカーンと突く

庭の香を居間に映して水仙花

袖子呉れし笑顔あかるき句友なり

ピタゴラスの定理水仙日和かな

◆草むら(1・20)

丹沢は刃物持ちけり北風

雄鶏が霧の襖をこじ開ける

新婚の新居の空気畳替え

◆無所属

茶柱の太き三本初炊き

ガソリンはあと一目盛雪女

寒晴れの海へかたむく魚付林

休日や薪ストーブに火を育て

歴史ある松の切株ひこばゆる

万太郎の一木一草春を待つ

双六とワインと男らしくない男

三日果つ被災の映像心苦しく

蝦蛄仙人掌這つて行くのか行かぬのか
福豆を買って豆撒く鬼やらい

片野 節子

峯尾ユキエ

清水美代子

松下 俊之

武居裕美子

寶子山京子

重満報

石井 秀稀

佃 悦夫

佐々木重満

小林永以子

畠 梅乃

一ノ瀬茂代

出澤 洋子

木村美千代

北村 文江

瀬戸 正洋

山本 すみ

岩楯恵津子
蓑宮 わか

秋の蝶見えぬ余生の眼鏡拭く

山口 千代

親子鯉へ数珠玉の風ひびきあふ

山崎 悦子

外を隔つ玻璃一枚や冴返る

山崎美知子

まぶしさはさびしさに似て花野径

山田 照子

宇宙船ノアの箱舟星月夜

山本 すみ

白鷺の水平飛行豆の花

湯本とし子

^{あじうら} 蹠に幼時の記憶霜柱

横塚 昌平

受付の込みあふ医院梅雨晴間

吉田 百代

朝日さす方より降りて初雀

吉田 康雄

山水を掬ふ手柄杓山法師

米山 翠

三島忌や仕事帰りに蒼き富士

來田 新子

五指かつと広げる奴大岡祭

若村 京子

オカリナのかすかな音色夜の秋

和田惠美子

*

◆お詫びして訂正します◆ (678号)

6頁松下俊之さんの句

(誤) 白い目を梵字に変へる蔵の市

(正) 白い目を梵字に変へる蔵の市

8頁小島ノブヨシさんの句

(誤) 桃咲いて雨が素通りしてをりぬ

(正) 桃吹いて雨が素通りしてをりぬ

おまえ鳶の舞う春の流木よ

大石 雄介

矢倉岳冬の旅人油瀝青^{アフラチヤン}

大石 和子

凧に木蓮 芽の空へ立つ

柴田 礼子

大丈夫とことばのように梅一輪

田畑ヒロ子

薬湯に浸る冬夜の風の音

山田 照子

雑煮餅ちいさく切られ朱塗椀

神野美代子

寒雀一生楽しく暮らしなさい

穂坂志げる

肩を越す髪馥郁と初鏡

須田 聡子

一月のだだをこねてる修正液

小澤 園子

雪婆フェイクニュースのあれやこれ

杉山あけみ

行く行かない行つてすつきり初詣

岡田 典代

掃き清め開く梅園待つばかり

青木 勝子

半島に砲台跡や水仙花

山口 千代

さらしくぢら陽の漣の婚衣裳

小島ノブヨシ

理事会日程 2/8、3/14、4/11

4/25 (定期総会)

(毎月第2木曜日 けやき15時より)

第77回小田原桜まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「桜又は花」「蝶(春に限る)」「いづれも傍題

可)各一句一組 未発表作品に限る

締切 令和六年二月二十二日(木) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒250-0111 南足柄市竹松一四六三ー七

加藤かほる宛 ○四六五ー七四一五〇六一

*作品は投句原稿どおり印刷しますので、楷書で、大文字、小文字ではっきりとお書き下さい。

*第二部への参加・不参加もご記入下さい。

選者 協会役員及び各地有力作家(投句者に限る)

賞 県知事賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時 令和六年四月七日(日)

会場 小田原市民交流センター(UMECO)

受付 十一時 投句締切・十二時 開会・十二時半

整理費 五百円(呈飲料)

席題 春季雑詠二句 総互選

賞 市長賞以下五十位まで 参加賞

*お願い 会場は飲食可能ですが、なるべく食事を済ませてご参集下さい。時節柄マスクの着用及び感染症防止対策にご協力下さい。

(主催) 小田原市観光協会 (主管) 小田原俳句協会

(後援) 各地俳句協会

川本育子

はるかなる大地の吐息 芒原

中根登美子

見渡す限りの芒が風に逆らう事なく波打っている景色が目に見えます。

昨年初めて、仙石原の芒原の中を歩きました。車で通りかかる事はありませんが、芒の中を歩いたのは初めての経験でした。芒原がまるで、大昔から大地の吐息に揺り動されている感覚を受けた作者に共鳴いたします。『大地の吐息』は言い得て妙だと感じます。秀句だと思います。

瀬戸正洋

極東の猫春眠す朽ちるまで

佃悦夫

おだやかな暮らしを楽しんでいる。「極東の」としたことで緊張感も生まれた。宿命のようなものも感じた。朽ちるには「むなしく終わる」という意味がある。誰にでもその日は必ずやって来る。突然やって来るものなのかも知れない。何か予兆があるものかも知れない。どうあがいてみても仕方ないことならば猫になればいい。猫になって春の夜をゆつくりと楽しめばいい。